

《京都》御所と離宮の栞 ～其の三十～

京都御所と茶

御茶は外来文化の一つとして平安時代には渡来し、鎌倉時代以降は、武家を中心に広がりを見せ、宮廷では独自の形式で茶の湯が行われていきました。今号では、江戸後期に京都御所で行われた新茶御壺口切之儀などのお茶に関わる儀式や京都御所内にある茶室を紹介します。

◆ 新茶御壺口切之儀

茶摘みを終えた頃、天皇の御茶壺は宇治の茶師に届けられ、新茶が詰められます。夏の暑気を避けて山中（愛宕山）で保管された御茶壺は、旧暦10月に下山して御所に運ばれました。

新茶を入れた茶壺の封を切ることを口切といいます。御所における口切の儀式とは、御対面ののち、料理や酒とともに新茶や菓子がふるまわれるもので、江戸時

代に宮中儀式として確立され、天皇の他、皇后、東宮などでも行われ、また將軍献上の御茶壺口切の儀式も別があり、これらは幕末まで行われました。口切の次第が「亭主」と「客」の作法を重ねる一般的な茶事の形式ではなく、宮廷で古くから行われた饗宴の形式に基づくものであることも、宮廷文化に融合させる形で茶の文化が導入されたことを示しています。



愛宕山から茶壺を下す様子



儀式前日に行われた茶壺の口切の様子



天皇の御対面の様子（御学問所）



饗宴の様子（小御所）

『旧儀式図画帖』36巻及び39巻（東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives）

◆ 東宮新茶御壺口切之儀

令和3年度秋の「宮廷文化の紹介」では、『旧儀式図画帖』に画かれた御三間における東宮新茶御壺口切之儀とうぐうしんちやおんつぼくちきりのぎの御対面の様子を再現しました。

この儀式では、御三間の上段の間・中段の間・下段の間の3室とその南にある御縁座敷が使用されました。3室を仕切る建具や、南側の建具が取り払われて、一つの大きな儀式空間が形成されました。

御対面の場面では、上段の間に着座した東宮（皇太子）に対して、関白とうぐうのだいじんや東宮傳大臣ほどう（東宮輔導の任にあ

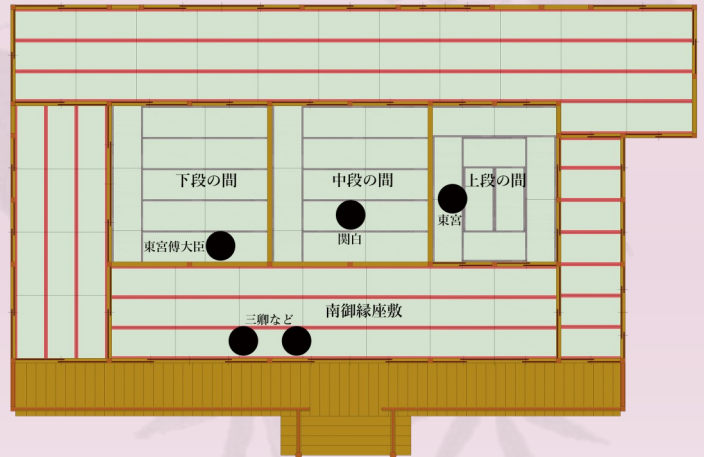
たった大臣）が中段の間に順に進み出て拝礼を行ったあと、三卿（東宮の教育を担当する公卿）らが下段の間で拝礼を行いました。

御対面が終わり、東宮以下が退出すると、室礼が改められました。関白と傳大臣のみ下段の間、三卿らは御学問所の西にある錦鶏間（日常の詰所）において、それぞれ御膳や新茶などのふるまいを受けました。



『旧儀式図画帖』39巻

(東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives)



御三間平面図



令和3年度秋の宮廷文化の紹介
御三間の展示の様子（南廂より）



令和3年度秋の宮廷文化の紹介
御三間の展示の様子（下段の間より）

◆ 御内庭の御茶室

京都御所はその前身となる御殿群が嘉永7年（1854）に焼失したあと、安政2年（1855）に再建されたものですが、御常御殿の前から北へ続く御内庭はその翌年から約1年がかりで作庭されました。

御内庭の木石や燈籠などの多くは、公家や武家、寺社及び御料所（皇室の領地）からの選りすぐりの献上物であり、仙洞御所などからも木石が移されました。

この御内庭は、孝明天皇や准后九条夙子（英照皇太后）のお好みが強ク反映されており、作庭にあたり御庭を巡覧して御指図を下されたこともありました。

御内庭南の築山の上には「錦台」が、北には遣水が床下をくぐる「聴雪」があります。どちらも様々な特徴のある個性豊かな御茶室です。

錦台 一築山の御茶室一

錦台は、秋になると鮮やかに色付く楓林にあることから名付けられ、御庭廻りの中で最後に完成した建物です。

「しま茸」（檜皮と柿を交互に茸いて縞模様とする）の屋根に赤色の土壁が印象的な外観で、縁側が廻る四畳半の御茶室の北側には、土間に面した三畳半の控えの間、眺望に適した吹抜けの板敷が続きます。

周囲の自然に溶け込む建築空間は、月夜に羽ばたく蝙蝠や微笑ましい表情の手長猿を画いた襖障子（[葉其の十五](#)）でやさらかに仕切れ、全体として表向きの御殿とは異なる自由で軽やかな造形が特徴です。



御内庭



錦台（西より）



錦台（北より）



「月に蝙蝠」



しま茸きの様子

聴雪 - 遣水の庭の御茶室 -

聴雪は、安政3年秋に作庭と同時に設計が始まり、元々あった御茶室の趣向を引き継ぎながら、孝明天皇と准后のお好みが強ク反映されました。柿葺のおくり屋根に真っ直ぐな一本の竹で造られた雨樋、萌黄色の壁に赤色の木材が目を惹き、建具を取り外すと御庭を見渡せる開放的なつくりとなっています。

南東にある四畳半の上の間には、捻れ杉丸太の釣床と蘭の置床がつき、愛嬌のある顔だちをした犬やブドウを取ろうとするリスが画かれた襖絵が配されています（[葉其の十九](#)）。中央の四畳半の中の間は、元の御茶室の鸚鵡と郁子という果物を画いた地袋（今建物にある地袋は近代の模写）を、琉球の朱漆塗で新たに詠えた縁が彩ります。そのほか、座敷廻りには、極上の楓の床板をはじめ、檳榔樹や紫檀、唐菜などの銘木が配されています。

翌年4月に完成した聴雪では、御茶室開きの和歌の会や酒宴が行われました。元治元年（1864）には、第14代将軍徳川家茂を聴雪に召して、酒宴でもてなされました。聴雪で用いられた唐金銭形御手水鉢「布泉」や龍の口手水鉢を吹抜廊下の先の御手水の場に実際に置いてみると、聴雪の風雅な雰囲気とも合い、御手水される光景が目浮かびます。

聴雪は、御茶室の要素を採り入れつつも、にじり口や炉などを持たないことから通常の茶事を前提としておらず、宮廷文化と茶の文化の融合、及び宮廷の美意識により築き上げられた、皇室における御茶室の清華といえます。



聴雪 外観



聴雪（上の間）



聴雪（中の間）



唐金銭形御手水鉢「布泉」



龍の口手水鉢



吹抜廊下と御手水の場

◆ 茶を題材とした絵襖

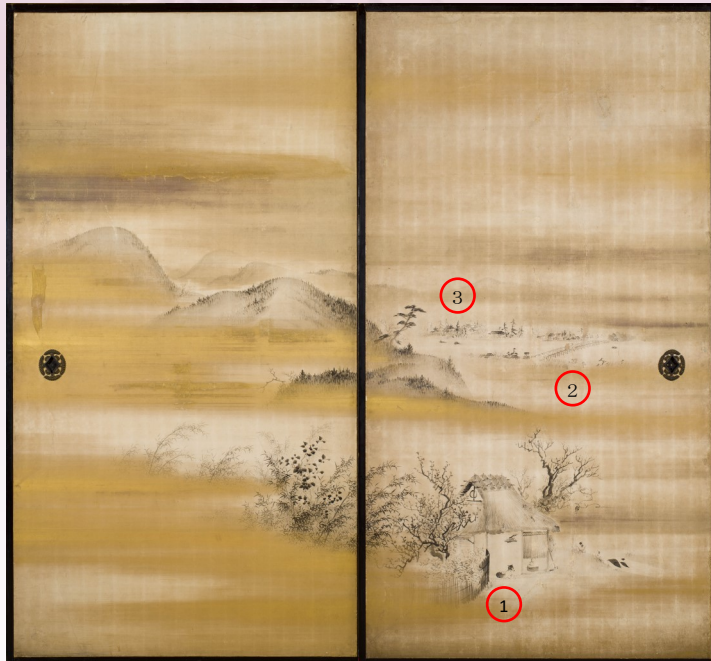
聴雪下の間の北面と東面に、宇治の茶摘みの風景を画いた絵襖が填められています。近景にわら葺きの家や茶摘みの様子、遠景に小高い山と川を画き、金や薄墨の霞を用いて近景と遠景を分けながら、全体的な統一感を出しています。

北面には、わら葺きの家の入口に足を投げ出した犬が座り、その上では燕が巣作りをしています(①)。小高い山の奥に見える大きな橋は宇治橋と恐れ(②)、橋の左側には平等院とみられるお堂が配されています(③)。

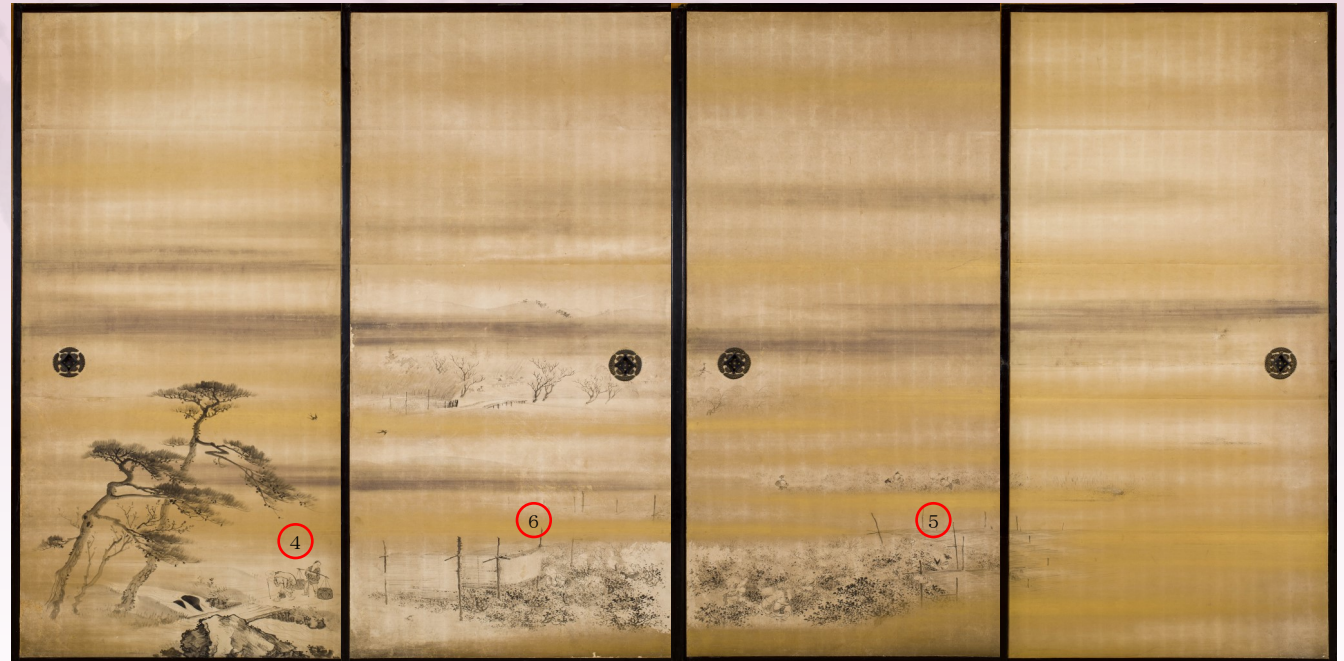
東面は、大きな松の木の下で、小さな籠に茶を入れた老人と茶を一杯に詰めた籠を天秤にして運んでいる男性が帰路につく様子(④)が画かれ、北面と東面の位置関係を巧みに利用し、藁ぶきの家の犬が老人と男性の帰宅を待っているかのようにも見えます。



聴雪下の間



北面

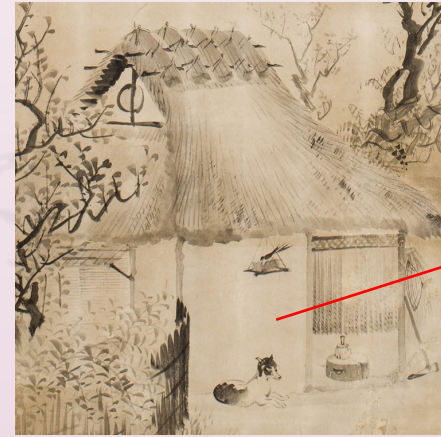


東面

また、茶畑の中には談笑しながら楽し気に茶摘みをする女性たちの姿(⑤)も見え、ほのぼのとした空間が広がっています。

茶畑には簾を木の棒に括り付けて日陰で茶葉を育てていますが(⑥)、覆下栽培といって、旨味や鮮やかな緑色を出すための栽培方法で、16世紀後半に宇治の茶畑で始まったとされています。

筆者とされる横山華溪は岸駒、円山応挙や呉春などから画技を学んだ横山崱山から横山家を継いだ絵師で、細かな描写を得意とし、画技の高い絵師であると評価されています。京都御所では、他にも御三間北側にある御献の間の下の間で「高雄秋の景」を画いています。



①わらぶきの家と犬・燕



①犬・燕



④籠に茶を入れて帰路につく老人と男性



③平等院とみられるお堂



②宇治橋とみられる大きな橋



⑥簾を木の棒に括り付けた様子

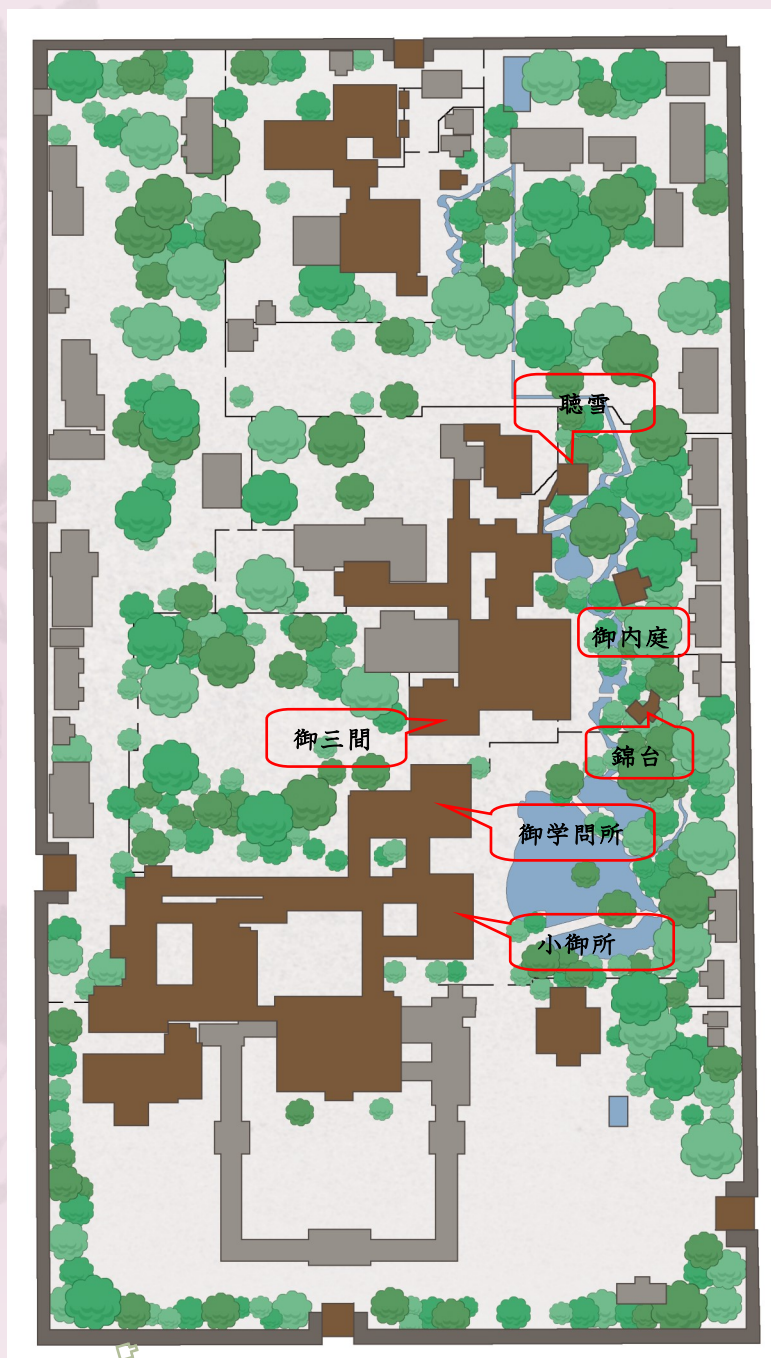


⑤茶摘みをする複数の女性



⑤談笑しながら茶摘みをする女性

京都御所案内図



今回ご紹介しました「小御所」、「御学問所」、「御内庭」、「御三間」、「錦台」は申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html>をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑3

宮内庁京都事務所

代表電話:075-211-1211

参観係直通電話:075-211-1215

其の三十:令和5年5月12日

